

対人恐怖心性と自己愛傾向が自己呈示に及ぼす影響

溝口英登

キーワード：対人恐怖心性 自己愛傾向 自己呈示

問題と目的

対人恐怖と自己愛は臨床的見地から密接な関係があると言われている。臨床的には自己愛人格も対人恐怖も“自己愛の障害”を背景にして生まれる問題として理解されている(川崎・小玉, 2007)。しかし、対人恐怖であることが必ずしも自己愛の病理と直結するとは限らず、対人恐怖だが自己愛を持たないもの、対人恐怖は持たないが自己愛は持つものが存在するなど、両概念の関連性は複雑性を帯びる(清水・川邊・海塚, 2007)。

対人恐怖心性とは、一般青年に見られる人見知りや過度の気遣いといった恥に対する敏感さを表すものである(清水・川邊・海塚, 2014)。対人場面で強い不安・緊張が生じる人は、人から変に思われることを恐れて対人関係を回避する傾向を持っている(永井, 1994)。

また、自己愛傾向とは、一般青年における自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求を表す構成概念である(清水・川邊・海塚, 2014)。ポジティブな自己概念を保とうとする機能を持つ一方で、誇大性・賞賛欲求・注目願望などの必ずしも適応的とは言えない側面を含む複雑な構成概念である(清水・岡村・川邊, 2011)。

清水ら(2007)は横軸を対人恐怖心性の高低、縦軸を自己愛傾向の高低として対人恐怖心性・自己愛傾向 2次元モデルを提示し、その類型ごとの特徴の検討を試みている。その結果、過敏特性優位型(対人恐怖心性が高く、自己愛傾向が低い)、誇大-過敏特性両向型(対人恐怖心性、自己愛傾向が共に高い)、誇大-過敏特性両貧型(対人恐怖心性、自己愛傾向が共に低い)、誇大特性優位型(対人恐怖心性が低く、自己愛傾向が高い)、中間型の5つの類型に分けられた。この5類型では、対人恐怖心性と自己愛傾向のそれぞれの強弱によって、他者に対して自己を呈示して印象を変えようとする行動にも違いが見られると思われる。

自己呈示は自分の望む印象を相手に形成さ

せようとする意図的な行動である(原・深田・樋口・高本, 2007)。自己呈示は、呈示形態によって自己高揚呈示と自己卑下呈示とに分類できる。自己高揚呈示は「他者に対して選択的に自己の肯定的な側面を呈示すること、自己の否定的な面を積極的に呈示することを避けること」(原・深田・樋口・高本, 2007)と定義される。この定義によると自己高揚呈示は、自己愛人格の特徴ともされる誇大的・自己顕示的な呈示形態であると言えよう。また自己卑下呈示は「他者に対して選択的に自己の否定的な側面を呈示すること、自己の肯定的な側面を積極的に呈示することを避けること」(原・深田・樋口・高本, 2007)と定義される。自己卑下呈示は日本では好ましい印象を与える呈示方法とされており、対人恐怖心性が強く、なおかつ自己愛傾向の強い群が選択しやすい呈示方法であると考えられる。

そこで本研究では清水ら(2007)の研究に倣い、自己愛傾向と対人恐怖心性の2次元相互関係モデルを作成し、類型ごとの自己呈示の特徴の検討を行う。また、本研究では自己卑下呈示や自己高揚呈示を行う意図を確認するため、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度を採用する。

本研究の仮説をまとめると

1. 対人恐怖心性が高く、自己愛傾向も高い類型(両向型)は、拒否回避欲求が高く、自己卑下呈示を行う。
2. 対人恐怖心性が高く、自己愛傾向が低い類型は、拒否回避欲求が高いが自己呈示は行わない。
3. 対人恐怖心性が低く、自己愛傾向が高い類型は、賞賛獲得欲求が高く、自己高揚呈示を行う。
4. 対人恐怖心性が低く、自己愛傾向が低い類型(両貧型)は、獲得賞賛欲求・拒否回避欲求共に平均的で、自己呈示は行わない。

方法

手続き Y大学の大学生を対象に講義にて2回実施。1部目(対人恐怖心性尺度, NPI-S)と2部目(自己高揚呈示, 自己卑下呈示, 賞賛獲得

欲求・拒否回避欲求尺度)の2部とも回収が確認された77名(平均年齢19.2歳, $SD=1.18$)を分析対象とした。

対人恐怖心性尺度 堀井・小川(1997)によるものを使用。“自分や他人が気になる”, “集団に溶け込めない”, “社会的場面で当惑する”, “目が気になる”, “自分を統制できない”, “生きることによって疲れている”の6因子構造をとる。“全然当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの7件法, 30項目。

NPI-S 自己愛人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory Short Version: 以下NPI-Sとする)。小塩(2004)によるものを使用。“注目・賞賛欲求”, “優越感・有能感”, “自己主張性”の3因子構造をとる。“まったく当てはまらない”から“とてもよく当てはまる”までの5件法, 30項目。

自己高揚呈示 吉田・浦(2003)の自己呈示規範内在化尺度の自己高揚呈示規範内在化にあたる項目を抜粋し, 一部修正して使用した。“まったく当てはまらない”から“とてもよく当てはまる”までの5件法, 11項目。

自己卑下呈示 吉田・浦(2003)の自己呈示規範内在化尺度の自己卑下呈示規範内在化にあたる項目を抜粋し, 一部修正して使用した。“まったく当てはまらない”から“とてもよく当てはまる”までの5件法, 11項目。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 小島・太田・菅原(2003)によるものを使用。“当てはまらない”から“当てはまる”までの5件法, 18項目。

結果

類型 今回の研究では, 調査対象者数が少ないこともあり, 中間型は採用しないことにした。各々の尺度合計得点の平均値から各々の属性の強弱で対人恐怖心性-自己愛傾向両向型(19名), 対人恐怖心性優位型(27名), 自己愛傾向優位型(19名), 対人恐怖心性-自己愛傾向両貧型(12名)と類型化した。

自己卑下呈示 最小2乗法・プロマックス回転による探索的因子分析を行い, 1因子解を最適解とした。因子負荷量が.30を下回った項目を分析から除外した。因子名は“自己卑下呈示”と命名した。

自己高揚呈示 最小2乗法・プロマックス回転

による探索的因子分析を行い, 1因子解を最適解とした。因子負荷量が.30を下回った項目を分析から除外した。因子名は“自己高揚呈示”と命名した。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 最小2乗法・プロマックス回転による探索的因子分析を行い, 2因子解を最適解とした。それぞれ“拒否回避欲求”, “賞賛獲得欲求”と命名した。

分散分析 各類型の特徴を調べるため, “自己卑下呈示”, “自己高揚呈示”, “拒否回避欲求”, “賞賛獲得欲求”各々について, 類型を要因とした1要因4水準の分散分析を行った。有意な主効果が見られたところでは多重比較(Bonferroni, $p=.05$)を行った(Table1)。自己高揚呈示の主効果が有意で($F(3,73)=6.69$, $p<.05$), 自己愛傾向優位型は対人恐怖心性優位型と比べて自己高揚呈示の平均値が有意に高かった。次に拒否回避欲求の主効果が有意で($F(3,73)=3.14$, $p<.05$), 対人恐怖心性優位型は対人恐怖心性-自己愛傾向両貧型と比べて拒否回避欲求の平均値が有意に高かった。また, 賞賛獲得欲求の主効果が有意で($F(3,73)=9.94$, $p<.001$), 自己愛傾向優位型, 自己愛傾向-対人恐怖心性両向型が対人恐怖心性優位型と比べて獲得賞賛欲求の平均値が有意に高かった。また自己愛傾向優位型が対人恐怖心性-自己愛傾向両貧型と比べて獲得賞賛欲求の平均値が有意に高かった。

Table1 各類型の平均値と標準偏差

	対人恐怖心性-自己愛傾向両向型 N=19 24.7%	対人恐怖心性優位型 N=27 35.0%	自己愛傾向優位型 N=19 24.7%	対人恐怖心性-自己愛傾向両貧型 N=12 15.6%	F値 多重比較
自己卑下呈示	3.09	3.16	2.92	3.02	
SD	0.61	0.78	0.83	0.73	
自己高揚呈示	2.98	2.60	3.30	3.03	6.69***
SD	0.46	0.54	0.59	0.56	自優>対優*
拒否回避欲求	3.44	3.72	3.34	3.10	3.14*
SD	0.60	0.70	0.54	0.59	対優>両貧*
賞賛獲得欲求	2.98	2.40	3.19	2.68	9.93***
SD	0.46	0.55	0.54	0.53	自優>対優* 両向>対優* 自優>両貧*

$p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

注) 両向: 自己愛傾向-対人恐怖心性両向型, 自優: 自己愛傾向優位型, 両貧: 自己愛傾向-対人恐怖心性両貧型, 対優: 対人恐怖心性優位型

考察

各類型の特徴 本研究の結果は相対的な意味に留まることに留意しながら, 多重比較の結果から各類型の特徴を以下に述べる。

対人恐怖心性-自己愛傾向両向型(N=19

24.7%) この類型は賞賛獲得欲求が高いが、自己卑下呈示、自己高揚呈示共に平均的であったため、自己呈示形態に欲求が表れていないことが示唆される。仮説では拒否回避欲求、自己卑下呈示が高いのではと予測したが、仮説と一致する結果は得られなかった。この類型について上地・宮下(2004)は恥の感覚への感受性や対人関係に強い回避傾向を示す反面、肯定的評価を強く望んでおり、その上、自己を否定される言動に対して極端に脆弱であるため、そのような場面を察知した場合には、恥や傷つきに対する防衛手段として素早く人間関係から退却することを指摘している。以上のことから賞賛獲得欲求は持っているが、対人関係に回避傾向を示すため、他者との関わりを持たなければならない自己呈示は行いにくい類型であることが示唆された。

対人恐怖心性優位型(N=27 35.0%) この類型は自己高揚呈示、賞賛獲得欲求を低く、拒否回避欲求を高く示した。仮説では拒否回避欲求が高いのではないかと予測しており、仮説と一致する結果が得られた。清水ら(2007)によると自己に対する否定感覚の低さを呈することが指摘されており、また徹底した否定的自己観のため、自己を他者視点からネガティブに判断しやすく、失敗を繰り返し考え込む(清水・岡村, 2010)ことが指摘されており、また清水ら(2002)によると人から注目されたり自分を主張するという欲求が低いと述べられており、これらの知見は今回得られた、自己高揚呈示と賞賛獲得欲求が低いという結果と一致すると考えられる。また鍋田(1997)によると臨床的な観点から、弱力的な対人恐怖タイプは、顕著な攻撃性は目立たないが、恥や羞恥心が中核にあり、期待される役割を演じきれない不安が強いと述べており、常に他者の視線を気にして、恥や羞恥心、不安から他者から見放されることを恐れることで、拒否回避欲求が高くなることが考えられる。

自己愛傾向優位型(N=19 24.7%) この類型は自己高揚呈示、賞賛獲得欲求を高く示した。仮説でも賞賛獲得欲求、自己高揚呈示が高くなると予測しており、一致する結果が得られた。清水ら(2002)によると自分自身に対しては、注目されたいという欲求や自分を有能であると

認識する(清水・海塚, 2002)ことが指摘されており、また、人からほめられたいであるとか自分を主張したいと思う(清水・海塚, 2002)といった特徴があげられる類型であると言える。これらの知見は本研究の自己高揚呈示、賞賛獲得欲求が共に高いという結果と一致するものである。以上のことからこの類型に属する者は、他者からの賞賛を得るために明確な意図を持った自己高揚呈示を行うことが示唆された。

対人恐怖心性—自己愛傾向両貧型(N=12 15.6%) この類型は自己高揚呈示、賞賛獲得欲求を低く示した。仮説では賞賛獲得欲求、拒否回避欲求が平均的で自己卑下呈示、自己高揚呈示が低いと予測したが、結果では拒否回避欲求が平均的で自己高揚呈示が低く、一部のみ支持されたと考えられる。この類型は浅い付き合いは上手にこなすことはできても深い付き合いには困難をきたす者が多く(清水・海塚, 2002)、また、対人関係においても情緒が深まらず機械的形式的関係にとどまってしまう(清水・海塚, 2002)ことが指摘されている。人とかかわりを深く持とうとしないため、人から賞賛を得ようとせず、また、機械形式的な関係にとどまってしまうことから、他者からの自らの印象を操作する自己呈示は行わない類型であることが示唆された。

今後の課題として、調査対象者数を増やして中間型も含めた上で、自己提示の様態を詳しく探ることが必要であろう。

引用文献

- 原 郁水・深田博己・樋口匡貴・高本雪子 (2007). 自己呈示に対する受け手の反応が呈示者の自己評価に及ぼす影響 広島大学心理学研究, **7**, 109-124.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成(統報) 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害—— 北大路書房.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 川崎直樹・小玉正博 (2007). 親和動機のある方から見た自己愛傾向と対人恐怖傾向 パーソナリティ研究, **15**, 301-312.
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理——対人関係の悩みの分析—— サイエンス社.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性与自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2014). 自己愛傾向と対人恐怖心性がバウムテスト指標に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, **1**, 117-125.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性・自己愛傾向2次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, **58**, 23-33.
- 清水健司・岡村寿代・川邊浩史 (2011). 対人恐怖心性・自己愛傾向2次元モデルにおける類型の安定性について 信州大学人文科学論集人間情報科学編, **45**, 73-80.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性与自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- 吉田綾乃・浦 光博 (2003). 自己呈示規範の内化傾向に関する探索的研究—日本人大学生における検討— 自己心理学研究, **1**, 27-39.